

(B) 活動・研究助成金 報告論文

「性器」の脱意味化と再意味化

——無限に転位する「親指P=クリトリス」

鈴木 紗和

Key Words 男根中心主義、転位、クリトリス、アナーキズム、優しい去勢

はじめに

なにが男と女を決定的に隔てるのかと問う時、「性器」というのは多くあがる答えの一つだろう。もっとも日常的に他人の性器を目にする機会はほとんどないのだから、目の前の相手が男／女だと認識する際に「性器」が直接その根拠となる訳ではない。更に多様性の時代と言われる現在、男女の二項対立それ自体が固定的なものではなく、かつその境界が必ずしも身体的特徴によって定められる訳でもないという考え方が日本社会でも徐々に共有されつつある。これらを踏まえると、性別を画定するものとして「性器」を挙げる本稿の問題設定はアクチュアルなものではないように思われる。しかし、先ほど示した昨今の状況をもう一度見てみよう。日頃「性器」を見て男女を識別することは確かにはないが、そこで男／女をしるしづける服装や振る舞いや名乗りといった性表現は大抵の場合、出生時に「性器」の形状に依拠して割り当てられた戸籍の性別に基づいている。トランスジェンダーに関する語りでは「性器」の除去及び形成手術ばかりが焦点化され、彼ら／彼女らに対する侮蔑の言葉もあるべき「性器」の不在及び人工性に注目したものである場合が多い。このよ

うに「性器」はいまだに、単なる器官ではなく男女二元論の強度を根底で支えている。

本稿は、「性器」に付与された意味の問い直しと再構成を通じて、男／女という二項対立的な性の観念を攪乱することを意図したものである。主に問題としたいのは、「性器」の意味に基づく男と女の二分法が常に不均衡を孕んでいるということである。既存の観念において男と女の位置は対等ではなく、ペニスはヴァギナに対して能動性を持つという点で特権性を付与されている。そのような「性器」を脱意味化／再意味化することは果たして、男と女の二項対立の固定性及び不均衡性を動揺させるための有効な戦略たり得るだろうか。

「性器」の意味化を問題化するに際して、本稿ではフェミニズム的な問題意識を含む哲学の思想と文学上の表象に注目する。性器が「性器」として現れるのは、特定の器官を特定の意味で以て名指す言語の効果である。このような視座に立つ時、「性器」の意味を別様に編み直すためには、意味化に関与する言語そのものを分析の対象とすることが必要になる。そこで、以下では言語を通じて性を思考し得る営みとしての哲学と文学に依拠しながら、先述した戦略の可能性と妥当性を問

うことを軸に論考を進めていく。

1. 男根中心主義批判の思想

本稿で「性器」の意味に注目するにあたり、問題としたいのは、ペニスが男の「性器」として特権化されてきたという点である。「西洋文明の黎明期から、ペニスは単なる肉体の一部以上のものだった」(フリードマン 2004: 8)と言われる通り、ペニスという身体部位は各時代及び各地域の文化の中で特別な意味を持たされてきた。さらにそのようなペニスの意味化は、フロイトやラカンによる精神分析の理論の中で普遍的なものとして確立された。両者の論考では、ペニスは二元的な男と女の身体の構成過程の起源という意味を付与され、ファルスとして立ち上がる。「女」はファルス＝ペニスの客体として位置づけられ、その「性器」はペニスの特権性に従属する形で意味を帯びる。以下では、フロイトとラカンによって理論化されたペニスの特権性、すなわちファルス＝ペニスを主体の位置に据えて他なる対象を定義しようとする意味体系を男根中心主義と呼ぶ。

本稿で取り上げるのは、こうした男根中心主義に抗してカトリーヌ・マラブーが提起したクリトリスの再意味化という戦略である。詳しくは後述するが、クリトリスは男根中心主義によって、かつ男根中心主義に抵抗するフェミニズムの言説によって、二重に不可視化されてきた。そのような「性器」に男根中心主義を攪乱する可能性を見出した点で、マラブーの試みは先行するフェミニズムの文脈を受け継ぎつつもその死角に光を当てたものだと言えるだろう。本稿でクリトリスの戦略に注目するのは、フェミニズムにおいてさえ等閑視されてきた女の「性器」を捨象しない形で男根中心主義批判を試みるためである。

ただし、クリトリスを焦点化するにあたり、女の「性器」によってファルスのなものが再構成されることは避けなければならない。こうした道筋

を探るべく、ここでは「転位」の思想に着目する。これはデリダの「差延」の概念に見出されるものであり、後述するイリガライとバトラーの論考は「転位」を通じて緩やかに連関しているように思われる。クリトリスの戦略の可能性は、この思想が拓く、意味の流動性によってあらゆる特権性が成立不可能になるという非男根中心的な体系の中に見えてくるのではないか。本章ではイリガライとバトラーの論考を素描した上で、その系譜の中にマラブーによるクリトリスの戦略を浮かび上がらせていく。

1 | 「女性的なもの」の運動性

イリガライは、男の「性器」をあらゆるものの起源として意味化する男根中心主義によって言語のシステムが支配されていること、つまり中立に見えるあらゆる言語が既に「男根的なもの」に裏打ちされていることを指摘した。ここで言う「男根的なもの」とは、「妥当性、一義性、真理」である(イリガライ 1987: 212)。これは言語的な次元では言葉とその唯一の真なる意味という固定的な関係を志向すること、身体的な意味ではペニスという「性器」を持つ男を唯一の性と見なすことだといえる。この「男根的なもの」を中心化する意味体系には男という性しか存在せず、「女」は男という性を補完するものとしてのみ現れる。すなわち男と女の不均衡を前提とする言語のシステムの中で、女の身体はペニスという「性器」の欠如及び対象として定義されることになる。

イリガライはこうした「男根的な」言語と身体のあり様に、「性的差異」を作動させること、換言すると一義性に収斂しないという意味で「ひとつではない」女の性の可能性を示唆することで以て対抗する。なお、この「性的差異」という語句が字義通りに受け取られたがゆえに、イリガライは生物学的な本質主義に陥っているとして批判されてきた。しかしながら、このようなイリガライの読まれ方をさらに問い直し、本質主義者という従来のイリガライ評を退ける横田祐美子のような論者もいる。本稿では横田の論考に依拠して、イ

リガライの思想を扱う。

横田によれば、イリガライの「性的差異」とは優劣の別を含まないばかりか、生物学的な男女の差異を意味するものではない（横田 2020）。この点を明晰に示すために、横田はイリガライがデリダの脱構築思想の流れを汲んでいることを指摘し、イリガライの「差異」をデリダにおける「差延 (différance)」に重なるものと見なす。デリダが提示した「差延」は「単一の起源や根拠の絶対性を揺るがすもの」であり、「終わりなくおのれ自身を乗り越えていく自己差異化の運動」を指す。すなわち「差延」とは自らの立つ地点に根を下ろすことの不可能性を提示し、そこから絶えずずれていく様相を表すものであり、横田はこれを「還元しえない差異」を生み出す「終わりなき転位の運動」として捉えている（横田 2020: 89-91）。したがってこの「転位」の運動とは、固定的な意味には決して到達せず、何処でもない地点へと常にずれていく運動である。そのような運動によって無限に生じるずれの軌跡こそが「差異」と名指されているのである。

以上を踏まえると、横田の視座におけるイリガライの「差異」は二元的な男／女の間にあるものではなく、規定された「男」と「女」からずれていく動きを意味するものである。よってイリガライが「性的差異」の中に位置づけようとしている「女性的なもの」とは、固定的な二項対立に基づいて「男」に対峙するものとしての「女」の本質などではないことになる。それでは、「差延／差異」の上に現れる「女性的なもの」とはいかなるものなのか。

横田はこれを解釈する際、「女性的なもの」が概念ではないという点に注目する。イリガライ及び横田において、概念として何かを捉えることは「移ろいゆく意味をひとつの堅固な枠組みによってしっかりと掴み取り、その特殊な流れをとどめて普遍的なものを形成する」（横田 2020: 95）ことだとされる。言い換えれば、概念化された意味はいかなる「差延／差異」も含み得ず、それゆえ言葉と意味の固定的な一対一関係をなすことになる

という点で「男根的」である。横田は、定冠詞つきの名詞である「女性性 (la féminité)」と形容詞の名詞化としての「女性的なもの (le féminin)」を区別し、イリガライが後者を指していることを強調する。「女性性」はずれようのない「男根的な」概念だが、「女性的なもの」はそうではない。それは「規定不可能で概念を超出する運動性」（横田 2020: 95）、つまり男根中心主義の意味体系に基づく「女」という概念に対して生じる自己差異化なのである。このように横田に依拠してイリガライを読む時、「性的差異」の中にある「女性的なもの」を語るその思想は、二項対立的な男女の固定性を突き崩し、規定された「女」からのずれを照射するものとして捉えられるだろう。

2 | ファルスの「転移」／「転位」

同じく、「転位」によって男根中心主義の攪乱を試みた人物としてジュディス・バトラーがあげられる。バトラーはフロイトとラカンの論考に批判的に介入し、両者のテキストに屹立する男の「性器」の特権性を問いに付す。本節ではそこで作動しているバトラーの「レズビアン・ファルス」の概念を、先に示した「差異」の思想、そして「女性的なもの」の姿に重ねる形で素描する。

バトラーによれば、フロイト及びラカンはそれぞれの論考において、身体が構築される過程の起点にペニスを据えている¹。身体の一部に過ぎないペニスはこのように意味を付与されて「性器」となり、ファルスとして確立される。バトラーは、まずフロイトにおけるペニス＝ファルスの位置が「諸例の連なり」によって成り立つのであり、絶対的な根拠を持つてはいないことを喝破する。すなわちファルスという意味はペニスが他の器官を代理する事例の反復を経て獲得したものであり、その特権性は起源からペニスに紐づけられていた訳ではない。またバトラー曰く、ラカンがファルスはペニスではないと断ることによってファルス／ペニスの関係を「象徴するもの」／「象徴されるもの」と見なす時、ファルスという意味はペニスという器官に依存している。それ

が「象徴するもの」であるためには、その対象たる「象徴されるもの」がなければならないからである。この依存関係をバトラーはファルスとペニスの同一性の否定によって逆説的に構成されるものと捉え、なぜ「ファルスがペニス以外の身体部位を象徴し得る」と考えてはいけなかつたかと問う（バトラー 2021: 114）。その上で、こうした「ファルスの属性の基本的な転移可能性」（バトラー 2021: 84）を拓くものとして、すなわち男性の「性器」の特権性が単一の起源を持つ固定的なものでないことの証左として作動するのが、バトラーの「レズビアン・ファルス」である。「レズビアン・ファルス」はファルスの属性を模倣するものとしてペニスではない何処かに位置を持ち、かつその位置につくことに常に失敗する。それは出現によって男の「性器」に固定されているファルスという意味がその位置からずらされ得るものであることを、また出現の失敗によって新たな位置を得られず何処までもずれていくものであることを明かす。

以上のように、バトラーはファルスという意味をペニスという器官から「転移」させることにより、意味と器官の結びつきの上に置かれた特権性を揺らがせようとしている。この「レズビアン・ファルス」の戦略を前節で示した「性的差異」の思想と関連づけるにあたり、注目したいのがバトラーの用いる「転移 (transfer)」と「転位 (displacement)」という語のずれ／重なりである。「転移」は、バトラーにおいてはペニスに宿っていたファルスの属性が他の身体部位へと移ることを指す語である。他方、バトラーは「転位」をファルスの特権性の「追放」に相当する語と見なす。加えて、横田の読解にもとづけば「転位 (déplacement)」は、一つの位置に留まることのない「女性的なもの」の運動性を形容する語としてイリガライの思想に見出せるものでもある。ここで再度、バトラーが「転移」によってペニスに代わって特権性を持つ新たなファルスの位置を示そうとしている訳ではないという点を強調したい。ファルスという意味の結びつく場所が他

へと移っても、特定の何処かに到達することはない。それゆえ「転移」はいつまでも繰り返され、その連鎖によってファルスの位置が無限にずれていく様相が呈される。すなわち、ファルスは「転移」に失敗し続けることによって「転位」している。ファルスの「転移」はそれがいつまでも完結しないという点において、ファルスの属性が何処でもない場所へと「転位」し続ける様を明らかにする。

したがって、「転移」の折り重なりとして示されるバトラーの戦略に、イリガライが示した「終わりなき転位」の動きを見て取ることができる。ところで、既に述べた通り、イリガライの「転位」とは「女性的なもの」を論じる際に浮かび上がってくる語であった。以下ではこれを踏まえ、「レズビアン・ファルス」の演じる「転位」／「転移」に関連するものとしてバトラーにおける「女性的なもの」を検討する。バトラーによれば、自らの戦略はファルスという特権性を「攻撃的な再領土化によって疑問に付す」（バトラー 2021: 117）ものである。すなわち、男根の権力の転覆を意図してレズビアニズムの中にファルスのなものを出現させることは、確かにペニス不在の性関係の可能性を抹消してペニス＝ファルスの特権性を再生産することに繋がりがかねない。しかしながらバトラーは、ファルスの属性をペニスなき性関係によって占拠してみせることで器官と意味の結びつきの固定性を瓦解させ、そしてその占拠もまた失敗するのだと示すことで特権性そのものを揺らがせている。こうしたバトラーの戦略において、「女性的なもの」はその形態の安定性が問われるものとして現れる。「レズビアン・ファルス」は、「女性的」形態にファルスを「転移」させ得ること、及びそもそもファルスの特権性それ自体が構成的であることを示す。それにより「女性的」形態は、ファルスを持つ主体たる「男性的」形態に対置されるもの、ファルスを持たない客体という意味づけからずれることになる。ここでバトラーが用いている「女性的」形態という語は、単一の意味を持つ概念としての「女性性」に置き

換えられるだろう。よって、「女性性」をはみ出すものとして現れるイリガライ的な「女性的なもの」はバトラーにおいて、「レズビアン・ファルス」の出現及びその失敗を通じて生じる「女性的」形態の不安定性の中に見出し得る。それはファルスの「転移」先となり、直ちにそれに失敗することによる「終わりなき転位」を経てペニス＝ファルスの客体として規定された「女性性」との間に生じるずれである。

3 | クリトリスの戦略

ここでは、クリトリスを「アナーキズム」の主体として再意味化するカトリーヌ・マラブーの試みを、こうした「転位」による男根中心主義批判として位置づけつつ素描する。

クリトリスは、ペニスとヴァギナの結合関係の外部として排除されてきた「性器」である。マラブーはこれを「不在とみなされ、切除され、切断され、否認された器官」(マラブー 2021: 10) と形容し、多層的に為されてきたその「抹消」の様相を記述する。その上で、未だ可視的な位置についたことがないクリトリスを思考の場に出現させようとする。ここで問いたいのは、この器官を男根中心主義的な意味づけとは異なる体系の中に置き直して再意味することは可能なのかという点だ。以下ではマラブーの論考に基づいてクリトリスを巡る戦略を取り上げ、その可能性を検討していく。

第一に、マラブーが指摘するようなクリトリスの「抹消」とはどのようにして為されてきたのか。この点を論じるに当たり、男根中心主義の下でクリトリスという「性器」の意味が二重化されてきたことに着目したい。クリトリスは「女性性」を裏切ると同時に、「女性性」をしるしづけるものでもある。クリトリスは女に似つかわしくないものとされながらも、女に固有のものとして位置づけられている。前者に関しては、クリトリスを「不具のペニス」(マラブー 2021: 9) として捉える視座に立った意味づけであると言えるだろう。ペニスに対して受動的な位置にあるヴァギナ

とは異なり、クリトリスは挿入によらず快楽を得られる独立した器官である。快楽の主体となり得るクリトリスを持つことは「男性性」を不完全にも志向することであり、「女性性」の概念からはみ出すことに他ならない。こうした認識の下、クリトリスの切除は「女」と名指された人間を「女性性」の中に押し込めるための手段として為されてきた。それは女の通過儀礼及び異常な性欲亢進の治療という物理的な切除であり、スピヴァックが示唆したように女を「性的対象あるいは再生産の手段や媒介として定義する」(スピヴァック 2020: 196) という象徴的な切除でもある。クリトリスはこのように、「男性性」への不完全な志向という形で「女性性」からはみ出すものと見なされたがゆえに「抹消」されてきた。

一方、後者の意味づけは主にフェミニズム内部において見られるものである。マラブーは、男根中心主義に抗してクリトリスの快楽を語り直そうとしたボーヴォワールやイリガライの試みが後進のフェミニストによって棄却されてきたことを指摘する(マラブー 2021)。ペニスとヴァギナの関係によらないクリトリスの再意味化は、しばしば退けられるべき本質的な「女性性」を特定の身体器官の上に留めておくことになると見なされる。クリトリスがこうして「女性性」のしるしとして意味づけられる時、その「抹消」は「女性性」への固執を非難するフェミニズムの言説によって行われる。

それでは、このように「抹消」されてきたクリトリスに光を当てるといふマラブーの戦略とはどのようなものか。特に後者の「抹消」はフェミニズム内部で起きているものであり、それに抗ってクリトリスを再意味化することは生物学的な男女二元論から距離をとるといふマラブー自身の立場と齟齬をきたしているようにも見える。この点に留意しつつ、クリトリスによる「アナーキズム」の様相を素描する。マラブーはクリトリスを「女性性に対する女性的なものの過剰、ジェンダーそのものに対するジェンダーの可塑性の過剰」(マラブー 2021: 148) を感知させるものと見なす。こ

ここで強調される「女性的なもの」とは、マラブーによれば「女性の脱自然化の後に到来するもの」(マラブー 2021: 150)である。換言すれば、クリトリスと結びつけられる「女性的なもの」は女というセックスに固有のものとしてされる何らかの性質を問いに付す際に現れるものなのである。先にあげたイリガライの場合と同様に、マラブーが自らの男根中心主義批判の戦略で「女性的なもの」という言葉を用いるのは女全般に共通する本質のようなものの存在を示すためではない。むしろ、それが何処までもずれていく様子を記述することで「女性性」をはみ出すものの不可視化に抗うためであるといえる。よって、クリトリスの焦点化を通じてフェミニズムにおける「抹消」を批判的に捉える時、マラブーが本質主義に引き戻されているということは適切でないだろう。クリトリスがしるしづけるのは「女性的なもの」の到来であって、固執すべき本質としての「女性性」ではない。

マラブーによれば、クリトリスはアナキーと共犯関係にある。起源的な命令の不在を指すアナキーは、「従属関係と特権的な起源からの派生を問いに付す」(マラブー 2021: 165)。権威に基づく秩序の中に位置づけられていないからこそ、その秩序に抵抗して「権力なき秩序」を掲げることができるのである。同様に、クリトリスはペニスを中心とする性関係の中に位置を持たないがゆえに、その関係の攪乱分子として機能し得る。なお、クリトリスがずれ続けるものとしての「女性的なもの」を指し示す器官である以上、それが志向する関係は自らを新たな特権的な位置に据えるものではあり得ない。したがってマラブーの戦略は、クリトリスを「女性的なもの」の到来する場として再意味化し、「権力なき秩序」を、すなわち特定の器官が中心化されることのない意味体系を目指して位置を無限にずらしていくことであるといえるだろう。マラブーの「アナキズム」とは、このようにあらゆる特権性を成立不可能にすることで男根中心主義を攪乱しようとするものである。

ところで、こうしたマラブーの戦略を前節まで

に示してきた思想の系譜に位置するものとして捉えることは適切だろうか。横田によれば、イリガライにおいてクリトリスは「快樂にのみ特化した〈一〉なる器官」である(横田 2023: 70)。つまりイリガライにもとづいて言えば、クリトリスという特定の器官の意味化は「女」という唯一の概念を脱する道になり得ず、むしろ「一義性」に属しているという点で男根的な振る舞いですらあるということになる。すなわち、ここで示したクリトリスの再意味化というマラブーの戦略は、確かに「女性性」からずれていく「女性的なもの」の到来を志向するものではある。ただしイリガライの論旨に照らせば、クリトリスという単一の器官への依拠は男根的な意味にとりつかれる危険を免れ得ないだろう。こうした一つの身体部位に焦点を当てる戦略が男根性を帯びることなく「終わりなき転位」という無限にずれる運動性を演じることは果たして可能なのか、可能だとすればそれはいかなる様相を呈するのか。

2. 「クリトリス=親指P」の意味

ここでは、先述してきた男根中心主義批判の思想に重なるものとして、松浦理英子による小説『親指Pの修業時代』を取り上げたい。松浦はその著作を通じて「何とかして性器結合中心主義的性愛観を突き崩そう」(松浦 1997: 13)としてきた作家である。ここで問題視されている「性器」の結合を唯一の到達点とする価値観は、その一点を志向するものとして二者の関係を一義的に規定するという点でまさに「男根的なもの」である。松浦が「性器結合中心主義」を唯一の真実へ向かうペニスの運動と捉え、ヴァギナはその客体としてのみ存在すると述べていることを踏まえても(松浦 1994: 46)、彼女の問題意識は前章で扱ってきた男根中心主義批判と重なるものと言えるだろう。

そこで、本稿では松浦が批判対象とする「性器結合中心主義」を男根中心主義と言い換え、前節

で述べた思想の系譜の中に松浦の小説を位置づける。ところでその代表作たる『親指Pの修業時代』は、女子大生「一実」の足の親指がペニスになるという事象に始まり、彼女が盲目の少年「春志」や同性の「映子」との恋愛関係、及び特殊な身体部位で以て性的なパフォーマンスを演じる興行集団「フラワー・ショー」の旅を通して規範に縛られない性のあり方を模索する様を描いたものである。「一実」の足に出現した「親指P」は多くの論者により、ペニスのパロディとして男根中心主義を動揺させる装置と見なされてきた（笹野 1993; 市村 1998 ほか）。ただ、それだけではペニスの特権性の裏面で意味を付与されてきた女の「性器」の位相を問うには足りないだろう。そこで本稿では「親指P」をクリトリスとして捉えたい。こうした解釈は松浦自身によって示唆されているのだが（松浦 1994）²、以下ではクリトリスを「隔たり」の器官かつ脱意味化／再意味化の場と見なして戦略の主体とするラブーの論考と重ねながら「親指P＝クリトリス」の位相を論じる。その際、ラブーの戦略に対して提起された三つの問いを参照し、それらへの応答を「親指P」を通して探るといふ形で論を進めていく。

1 | 「女性的なもの」の現れる場

第一に、クリトリスを「女性的なもの」のしるしとして語り直す戦略の射程を問う。杉浦鈴はラブーに対して、クリトリスという「生物学的なもの」を脱男根中心主義的な快楽のシンボルとすることの危うさを指摘している（杉浦 2022）。女の「性器」の特権化という本質主義的な身振りを避けながらクリトリスを「女性的なもの」の現れる場として再意味化することは可能か、この点を松浦による「クリトリス＝親指P」の表象を通して検討する。

「親指P」の形状は、ペニスと完全に同じではないがよく似ており、射精こそしないものの刺戟を受けると勃起する、オルガスムスに達することができる、他人の「性器」に挿入可能という点でもペニスに近いものである。こうした性質から作

中では専ら異形のペニスとして扱われるのだが、ここでは松浦自身の記述を踏まえ、「親指P」をクリトリスと見なす。ペニスと同じく快楽を得られる器官であるはずが、身体の構造上不可視かつ受動的なものでしかあり得ず、それゆえにクリトリスは「不具のペニス」とされてきた。「親指P」は、そのような器官が親指に出現することによって可視的に、そして「性器」の挿入によらない独立した快楽の主体として存在するようになったものである。

加えて、「親指P」として現れたこのクリトリスは繰り返される「抹消」の危機をすり抜け、可視的なものであり続ける。当初「一実」の恋人であった「正夫」は性行為において「親指P」を徹底的に無視し、自らのペニスを「一実」のヴァギナに挿入することによる快楽のみを求めた。「正夫」にとって、「女」であるというのは「受け身で、相手のなすがままに」（松浦 2006: 上72）なることである。また「一実」は彼との性行為中に「私はあくまでも女だった」（松浦 2006: 上66）と感じており、この「女」というのは男性の「性器」を受け入れる身体としてのそれを指すものと思われる。こうした意味で「親指P」を女の「性器」からはみ出るものと見なしたがゆえに、「正夫」はまず無視するという形で象徴的に、さらには切り落とすことで物理的に、それを「抹消」しようとする。しかし、いずれの「抹消」も「親指P」は回避する。「正夫」から逃れて出会う「春志」との関係において「親指P」は切り落とされずに「一実」の一部として肯定され、その快楽は二人の親密さの中に包摂される。すなわち切除に晒され、なおかつその脅威を潜り抜けて存在し続ける「親指P」は、「抹消」されない「女性性」の過剰、つまり「女性的なもの」の現れる地点として再意味化されたクリトリスである。

以上を踏まえてクリトリスを「女性的なもの」のしるしとして意味づける時に検討する必要があるのが、「親指P」の有無に関わらず自分は女だという意識を「一実」が持ち続けていることである。当初の「一実」は、異性愛規範を無抵抗に受

容している「性器に基づく性別」(松浦 1997: 85)としての「女」である。しかしながら「親指P」の出現により、「一実」は恋人のペニスを当然のように受け入れることへの違和感、「性器」結合によらない快楽の発見、同性への恋愛感情及び性的欲求の芽生えといった形で、自らが内面化していたその規範が実は絶対的なものではないことに気づいていく。そのような変化を経た「一実」は、「他性・集団・他者などによって規定されるジェンダーと性、それぞれの同一性というより様々な二項対立を超える性的アイデンティティ」(アマン 2000: 89-90)とアマンが述べる意味での女、つまり固定的な「女性性」を飛び越えた存在である。換言すれば、クリトリスが「親指P」として顕在化したことで「一実」は男根中心主義にもとづかない快楽の独立した主体となり、「女性性」の過剰を体現するようになる。その上で、なおも「一実」は女、男女の二項対立を超えるものとしての女である。こうした点に、「女性性」という名詞からはみ出してずれていく形容詞としての「女性的なもの」を見出せるだろう。このように、クリトリスの焦点化に決して固定的なものではない新たな意味を見て取るというマラブーの戦略を、「親指P」に重ねて捉えることができる。

なお、この議論においてクリトリスを巡る生物学的本質主義が完全に退けられているとはいいきれないだろう。この点を補うために、「政美」に関する記述も併せて取り上げておく。ペニスの切除とヴァギナの形成を経たトランスジェンダーとして³登場する「政美」は、男根的な異性愛関係の内に存在する「女」を志向しているかのように見える。しかしながら自らの身体について、クリトリスを持たないことによって「自分が本当は男なんだってことを、肝に銘じて」(松浦 2006: 下 261) いるのだと語ってもいる。つまり、「政美」においてクリトリスは「女性性」の象徴なのである。こうしたことを、先述した「親指P」というクリトリスの意味に照らしていかにか考えるべきだろうか。

ここで、「政美」が「一実」に対して「あたし、

本当は男好きじゃないのよ」「男として女を愛するんじゃないよ、女として女を愛したいの。あたしは女になりたかったのよ」「理想の恋人は現実には決して存在しない、股間にペニスのある女」(松浦 2006: 上 349; 下 260; 下 261) と吐露している点に着目したい。これらの発言を踏まえると、「政美」のセクシュアリティはペニスによって「女」を指向する「男性性」からもヴァギナによって「男」を指向する「女性性」からも離れた地点に向かおうとするものだと考えられる。「政美」において「男性性」及び「女性性」の双方から離れた地点をしるしづけているのは、まさにクリトリスの不在なのではないか。「男なんだってこと」を見失わないためにクリトリスを持たないという選択自体は、その器官に付与された意味から逃れることにはならない。ただ、異性を志向する「性器」を持たない「政美」の身体において、クリトリスの不在は最早彼／彼女が保持しようとした「男性性」も諦めたはずの「女性性」も指し示してはいない。つまり、本人の意図さえもはみ出す形で「政美」のクリトリスは脱意味化され、それが自らの不在によって逆説的に象徴していたはずの「女性性」は既に乗り越えられていることになる。イリガライにおける「女性的なもの」が「規定不可能で概念を超出する運動性」を指す点において、いずれの名詞的な性別化も拒む「政美」の身体、そして「男性性」も「女性性」も明確なものとして意味し得ないクリトリスの不在はまさに「女性的なもの」の到来する場だと言える。よって、クリトリスを「女性的なもの」と関連づけて再意味化することは必ずしも生物学的なその存在に依拠している訳ではない。このようにして、マラブーによるクリトリスの戦略及びそれと重なる松浦によるクリトリスの表象は本質主義という一つの陥穽を回避し、杉浦が指摘するところの「多様なありようの身体の持ち主と連帯・協働する余地」(杉浦 2022: 31)を確保しながら作動し得る。

2 | 「男性性」の脱構築

ここでは、クリトリスの再意味化に関連づけて「男性性」及び「男性的なもの」を再考することに取り組む。その際、マラブーの論考においてトランス男性の「男性性」が「抹消」されているという古怒田望人の指摘（古怒田 2022）を踏まえ、覇権的なシス男性のそれからずれた「男性性」を男根中心主義によって排除されるものとして捉える。ところで「親指P」は作中において基本的にペニスとして扱われており、ヴァギナに挿入すべきもの、即ち「女」へと向かう能動的で侵犯的な「男性性」を有するものと見なされている。しかしながら、作中で最も顕著に男根的な人物である劇作家の「宇多川」は「一実」が持つ「親指P」を、本物のペニスに劣るものと見なす。「宇多川」の男根性の下、「親指P」は「男性性」の不完全な形象、つまり「不具のペニス」としてのクリトリスの位置に釘づけにされている。

このように「男性性」の体現に失敗する「親指P＝クリトリス」の存在を、「女性性」と読み替えることによって肯定するのは適切ではないと思われる。むしろここで必要なのは、その「男性性」の不完全さに「男性性」それ自体を脱構築／再構築する可能性を見て取ることだ。もっとも再構築といっても、それは新たな概念を作り出すことではなく、「女性性」に対する「女性的なもの」と同様に、「男性性」からずれていく「男性的なもの」の到来を見出すことであるべきだろう。

それでは、松浦が描く「親指P＝クリトリス」において、「男性性」の脱構築／再構築はどのように為されているのだろうか。最も顕著にその様相を見て取れるのは、先述した「一実」をはじめとする「フラワー・ショー」の面々が「宇多川」と対決する場面である。女性蔑視及び同性愛蔑視に満ちた「宇多川」の劇に出演することになった「一実」たちだが、押しつけられたシナリオを裏切る振る舞いによってその劇を形成する男根中心主義を内部から切り崩す。このことに激怒した「宇多川」は「一実」の「親指P」を「本来あるべきじゃない偽物のペニス」（松浦 2006: 下 306）

と侮辱する。覇権的な「男性性」による不完全な「男性性」の軽侮を、ここに見出すことができるだろう。対する「一実」は自らの「親指P」が完全な「男性性」を持ち得ないものであると認めた上で、「男のペニス」の特権性に拘る「宇多川」を真っ向から「幼稚」と断じる。実際に「宇多川」の男根中心主義がシナリオの崩壊という形で挫かれたように、こうして「一実」は自らの不完全さで以て覇権的な「男性性」を掘り崩し、同時に不完全さをそれ自体として肯定している。

以上のような「男性性」の脱構築／再構築は、「保のペニス／慎のペニス」に目を向けることを通じてより明確に見出される。「保」と「慎」はシャム双生児で、「慎」の上半身は「保」の体内にあり、ペニスを含む下半身だけが「保」の腹部から外に出ている状態だ。「慎」の身体が埋まっているために「保のペニス」は先端のみが露出している。「保のペニス」は大きさや位置ゆえにヴァギナに挿入することができず、「慎のペニス」は勃起するだけで射精をしない。これらの性質は、「不具のペニス」であるクリトリスに類似している。ところで深津謙一郎が指摘する通り、「保」は男根中心主義に囚われた人物である。自らのペニスに欠陥があるという苦悩と「性器」結合への拘りゆえに、「慎のペニス」を痛めつけ、恋人の「映子」を傷つける行為を繰り返している（深津 2006）。そうした屈折の果てに、自暴自棄になった「保」は「慎のペニス」を「宇多川」の劇中で切り落とそうとする。しかしながら、「男のペニス」などなくても二人の交わす愛情や欲望は十全なものであり得るのだと示す「映子」の言葉を受け、ペニスの不完全さをありのまま受け入れることができるようになる。「保」が挿入できない自らのペニスをそのままに「映子」と抱き合うその時、完全であることを是とする「男性性」は脱臼させられている。

ここまで述べてきたように、「一実」と「保」の双方に「男のペニス」とは異なる自らの不完全さを是認する態度を見出すことができる。松浦は「親指P」に仮託してクリトリスを描くことを

試みている(松浦 1994: 46)のだが、反対に、こうした男根的ではない不完全なペニスの表象可能性もまた、それがクリトリス的なものとして存在することに支えられているように見える。換言すれば、ペニスを男根的な意味から引き離して描き出すためには、その特権性を持ち得ないものとして意味づけられてきたクリトリスに依拠して「男性性」の不完全さを肯定的に照射することが必要になる、ということである。そして、このようにして現れる特権的なそれとは別の「男性性」のあり方は、古怒田が示唆したようなシス男性のそれから隔てられたトランス男性の「男性性」の表象可能性にも通じる(古怒田 2022)。「不具のペニス」の承認及び「男性性」の「脱シスジェンダー化」は、いずれも覇権的な「男性性」との差異を「女性性」の範疇に回収してしまうのではなく、「男性性」そのものの脱構築として提示しようとする態度によるものだと考えられる。よって「男性性」を、完全な「男のペニス」からのずれを無化して語ることは最早できないだろう。そして覇権的な「男性性」との距離が、劣位の表れではなく肯定可能なずれと見なされる時、「男性性」それ自体が揺るぎない単一の形を持つものではあり得なくなり、そのずれ続ける様相を「転位」の運動性として捉えることが可能になる。この点に、固定的な「概念」を脱した「男性的なもの」の出現を見ることができないのではないか。したがって松浦の「親指P=クリトリス」は、「保のペニス/慎のペニス」と交わることを通じて、こうした「男性性」が脱構築/再構築される場にもなると言える。

3 | 感じないクリトリス

ここでは、マラブーの戦略について藤本一勇が指摘した「感じないクリトリス」をいかに肯定するかという問題(藤本 2022)を検討する。前提として、松浦においては「快楽」というもの自体が抜本的に書き換えられている。松浦による「快楽」の語りは男根的なオルガスムスを離れ、性感帯をあらゆる身体部位に転移させ、最早性的です

らないような皮膚感覚と精神の結びつきに依拠したスキンシップへと広がっていく。『親指Pの修業時代』、特に「一実」と「映子」の関係においては「貪欲にかつ理知的に惹き出し合った快感と欲望を性器結合によって一つの大きな快楽に昇華させる型通りの性行為よりも、体も心もときめきで満たす密接な肌の触れ合いの方が好ましい」(松浦 2006: 下297)という「一実」の心情に顕著に表れているようにそうした「快楽」のあり方が強調されている。

このように松浦における「快楽」の性質を理解した上で、「親指P」の「快楽」がどう描かれているかという点に注目する。まず「親指P」は「一人の時に愉しみを与えてくれるだけの無垢な器官」(松浦 2006: 上76)とされており、実際「一実」はしばしば自らの欲望からこれを用いて自慰をする。「親指P」はペニスを必要とせずに「快楽」を得られる器官として位置づけられている。もっとも、この時点ではまだ「親指P」の「快楽」は男根中心主義の「構造的外部」という意味づけを完全には脱していない。クリトリスを通じたオナニズム的な「快楽」の肯定は確かに「性器」の結合及びその目的/結果たる生殖を特権化する男根中心主義への反抗となり得る。ただ浜崎史菜が指摘する通り、クリトリスは外部として排除されることで男根的な意味体系を支えてきた存在でもあり、その焦点化はかえってその体系を強化することにも繋がりがかねない(浜崎 2022)。

ここで問う必要があるのは、性的でない「快楽」でさえも感じないクリトリスをどのように捉えるのかという点である。藤本はクリトリスを巡る戦略が享楽主義的になりかねないと考え、何も感じない「石女」としてのクリトリスが「抹消」されることを懸念している(藤本 2022)。本稿で繰り返し示してきたマラブーによるクリトリス再意味化の戦略では享楽しないクリトリスの包摂は困難であるように見えるのだが、この点はいかにして解消することができるのか。

そこで、「親指P」に類似する/対置し得るものとして「映子の小指」の表象に目を向ける。ア

マンが言うように、「他の九枚のすべすべした爪によって隅に追い遣られたように映る異形の爪」(松浦 2006: 下 138-139) として描かれるそれもクリトリスの換喩として捉えられるものである(アマン 2000)⁴。小谷は「親指P」と「映子の小指」をともに「靴という制度に嵌まらない」(小谷 1997: 214) ものと位置づけているが、この指摘の通り両者は「女性性」をはみ出すクリトリスという位置を共有していると考えられる。ここでは、「映子の小指」を「感じないクリトリス」と見なすことを通じ、本節冒頭の問いを検討する。

「一実」は「映子の小指」に愛着を抱いているが、それに触れても「性的昂奮は起こらず、いとおいしいものをいとおしんでいるという充足感を覚えるばかりである」(松浦 2006: 下 146)。「映子の小指」がクリトリスであるならば、二人の関係の中で性欲ではなくいとおしさの向かう先であるという点において、それは享楽しない器官として焦点化されていると言える。また、そうしたスキンシップの一環として二人が互いの「親指P」と「小指」とを愛撫し合う場面がある。この時、勃起する「親指P」は享楽するクリトリスであり、勃起しない「映子の小指」は享楽しないクリトリスである。こうした差異にも関わらずそれらへの愛撫が相互的なものとして為されている点に、「石女」としてのクリトリスが「快樂」の主体としてのクリトリスと同時かつ優劣の別なく存在している様相を見出すことができるだろう。愛撫の対象とはなるがなおも「石女」であるクリトリスを「抹消」することなく表象する松浦において、藤本が問うているようなクリトリスを享楽主義から離れたところで肯定する可能性を見て取れるのではないか。

3. クリトリスの脱意味化／再意味化

クリトリスの意味を問い直すことによって為される性の攪乱は、いかなるものであり得るか。こ

こではこれまでの論考全体を整理しつつ、冒頭で提起した問いに対応するこの点を明らかにしていく。

先に述べた通り、松浦が「親指P」及びそれと接点を持つものを通じて描き出したのは、クリトリスという「性器」の意味を取り去ること、また書き直すことを経て現れる器官の存在可能性であった。「親指P」は「政美におけるクリトリスの不在」と共鳴しながら「女」の概念をはみ出す「女性的なもの」の到来をしるしづけ、「保／慎のペニス」とともに「男性性」の脱構築を演じ、「映子の小指」との関係によって「感じないクリトリス」の存在を照射する。「親指P」として現れたクリトリスは一つの位置に収まらず、隣り合う器官と重なる複数の点を通過しながら、「抹消」されることなく存在し続ける。このようなクリトリスを描く松浦の手つきはまさに、「クリトリスに触れることは隔たり(écart)の経験をなすことに等しい」(マラブー 2021: 14) というマラブーの記述を想起させる。マラブーによれば、「隔たり」は「差異の逆説的な同一性を破断し、そこに潜む多様性を明らかにする」(マラブー 2021: 15)。「親指P=クリトリス」は「女性性」を裏切る／しるしづけるものという「逆説的な同一性」を穿ち、単一の意味に還元されないという「多様性」を介して無限に開かれている意味化の可能性を指し示す。こうしてクリトリスは固定的な意味を脱ぎ、絶え間ない再意味化と脱意味化の折り重なる場となる。よって松浦が「親指P」を通じて浮かび上がらせたクリトリスのあり様は、「隔たり」の場、すなわち同一性に裂け目をなし続けるものというマラブーが意図したそれと重なり合うように思われる。このようなものとして現れる限り、クリトリスは先に述べたイリガライによる「〈一〉なる器官」という位置づけを乗り越えられる。両者の戦略で焦点化されるのは確かにクリトリスという特定の器官であるが、それは男根的な一義性としての「〈一〉」では決していない。

既に述べたように、マラブーにおける「アナーキズム」は、クリトリスという男根中心主義の秩

序に属さない存在を主体として「従属関係と特権的な起源からの派生を問いに付す」こと、即ち男根的な意味体系により「抹消」された存在への着目を通じてその意味体系自体の正当性を掘り崩すことを指す。他方、「親指P」を通じて松浦が描いたのは〈ペニスによって「女」へと向かう「男」〉と〈ヴァギナによって「男」へと向かう「女」〉という二項対立からはみ出す性のあり様であり、ここではまさに松浦自身が「優しい去勢」と名づけたもの、すなわち二元的な他性を指す器官として意味づけられた「性器」を脱ごうという志向性が示されていると言える。なお、双方の戦略に見出される運動性は特定の何処かを目指すものではない。マラブーが自らの論考に出現させるクリトリスは「隔たり」の場であり、そこに到来する「女性的なもの」は概念たる「女性性」からずれていく自己差異化の運動である。同じく、松浦のいう「優しい去勢」は身体を到達すべき何らかの理想へと方向づけている訳ではなく、その戦略が指し示すのは「性器」に基づく二項対立から逃れていく道筋のみだ。こうした何処でもない場所へとずれていく「転位」の動きこそ、両者がクリトリスを通じて描き出しているものである。

おわりに

本稿では不均衡な男女二元論を問い直すことに取り組んできた。実のところ、それは確固たる一つの到達点を持ち得ない試み、正確には特定の地点に到達することを常に避けなければならない試みである。「性器」の再意味化が別の固定的な意味を据えるという形で為される場合、男根的な意味を再演することになってしまう。したがって、「性器」の脱意味化と再意味化が男根中心主義に抗する有効な試みであり得るとすれば、それは「性器」の意味をずれ続ける運動性の只中で思考することを通して、いかなる特権性も確立され得ない意味体系を拓くという形をとるだろう。マ

ラブーと松浦の重なる点において「性器」の脱意味化と再意味化は、クリトリスが演じるこうした「終わりなき転位」の動きとして捉えられる。そして「アナーキズム」が拓く「権力なき秩序」及び「優しい去勢」が方向づける「性器からの解放」の様相は、このような「転位」の終わりのない連りの内に見て取ることができるだろう。本稿で展開した「親指P＝クリトリス」の戦略は、ずれ続ける意味の運動性の可視化によって男根的な意味体系を掘り崩し、「性器」の意味に基づく男女の二項対立の根底を揺らがせるものではないだろうか。

注

- 1 バトラーが注目しているのは、ジークムント・フロイト「ナルシズムの導入にむけて」及びジャック・ラカン「ファルスの意味作用」である。
- 2 「親指P」をクリトリスと見なしている論考としては、鈴木たかし(1993)があげられる。
- 3 「政美」をトランスジェンダーとして、さらにいえばトランスセクシュアルとして位置づけることの妥当性については留保が必要である。作中では一貫して「彼」という代名詞が当てられており、「一実」は「スカート」を穿いているでもないし、自分を女に見せたがっているのかどうか分からないと感じている(松浦 2006: 上 253)。更には「政美」自身が「わかってるわよ、性染色体はXYのままだって。正真正銘の女だと信じ込んでたりしないわよ」と言う箇所もある(松浦 2006: 下 88)。これらの点だけを見ればトランスジェンダーを排除する本質主義的な言説とも捉えられるが、「性器に基づく性別」を退ける松浦が実際に「スカート」や「性染色体」に基づくジェンダー/セックスの絶対性を重んじている訳ではないことは明らかであろう。
- 4 ただしアマンは「映子の小指」と「親指P」を比較し、前者をクリトリス、後者を男根というように位置づけている(アマン 2000)。本稿ではこの構図には乗らず、両者をそれぞれクリトリスと見なして論じる。

参考文献

- アマン、カトリン(2000)『歪む身体——現代女性作家の変身譚』専修大学出版局。
- イリガライ、リュス＝柗沢直子・小野ゆり子・中嶋公子訳(1987)『ひとつではない女の性』勁草書房。
- 市村孝子(1998)「ジュディス・バトラーと松浦理英子：視線の交差」岩手大学人文社会科学部編『Artes liberales』62号：19-23。

- 小谷真理 (1997) 「現代作家論シリーズ第12回 松浦理英子論——サイボーグ・ファロスの修業時代(煉獄篇)」『文學界』51巻8号：206-216.
- 古怒田望人 (2022) 『抹消された快樂』において抹消されるトランスの快樂 東京都立大学西山雄二研究室編『リミトロフ』1号：18-25.
- 笙野頼子 (1993) 「夢の中の体」『文芸』32巻4号：92-94.
- 杉浦鈴 (2022) 「本質主義への危険な接近」東京都立大学西山雄二研究室編『リミトロフ』1号：31-32.
- 鈴木たかし (1996) 「そして性差は消滅した——クリトリスの人間の世界律」『松浦理英子とPセンスな愛の美学 トーキングヘッズ叢書8』書苑新社.
- スピヴァック, ガヤトリ・C = 鈴木聡・大野雅子・鶴飼信光・片岡信記 (2000) 『文化としての他者』紀伊国屋書店.
- バトラー, ジュディス = 佐藤嘉幸監訳, 竹村和子・越智博美訳 (2021) 『問題=物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』以文社.
- 浜崎史菜 (2021) 『「哲学」を可能にする『外部』——クリトリスを父権的言説内に包摂し特権化するリスクの再考』東京都立大学西山雄二研究室編『リミトロフ』1号：26-30.
- 深津謙一郎 (2006) 『「親指Pの修業時代」——「性的奇形」としての男根主義』清水良典編『松浦理英子 現代女性作家読本』鼎書房, 94-97.
- 藤本一勇 (2021) 「クリトリスのノミネート(命名・指名)——『抹消された快樂』」東京都立大学西山雄二研究室編『リミトロフ』1号：51-53.
- 松浦理英子 (1994) 「文学とセクシュアリティ」『早稲田文学 [第8次]』214号：38-47.
- (1997) 『優しい去勢のために』筑摩書房.
- (2006) 『親指Pの修業時代(上)』河出書房新社.
- (2006) 『親指Pの修業時代(下)』河出書房新社.
- マラブー, カトリーヌ = 西山雄二・横田祐美子訳 (2021) 『抹消された快樂——クリトリスと思考』法政大学出版社.
- 横田祐美子 (2020) 『『女性的に書く』とはいかなる身振りか——イリガライの差異の哲学にもとづいて』『立命館言語文化研究』32巻3号：87-98.
- (2023) 「意味の流動性とふたつの唇——イリガライにおける叡智的なものと感覚的なものの交差」日仏女性資料センター編『女性空間』40号：65-72.

